関連する
MLGsの目標

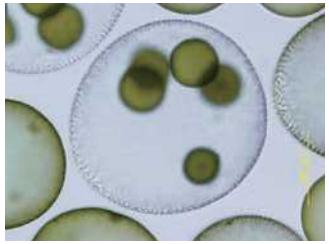
びわ湖の生き物たち

プランクトンは小さな魚に食べられ、小さな魚は大きな魚に食べられ、その魚は鳥に食べられます。生き物たちは微妙なバランスの中で生きており、それぞれの環境に適応して生活しています。ここでは、びわ湖にすむ生き物たちのことを知ってみましょう。

■小さな生き物大きな役割（7-5 植物プランクトン）

水中をゆらゆらして生活している小さな生き物を、プランクトンと呼びます。植物プランクトンは、動物プランクトンに食べられ、動物プランクトンは小さな魚の重要なえさとなっています。

時に、植物プランクトンはアオコや赤潮の原因となりますが、食物連鎖の基盤としてとても重要な存在なのです。



ボルボックス・ビワコエンシス
（写真提供：国立環境研究所）

■底にすむ生き物（7-19 底生動物）

海や湖、川の底にすんでいる貝やエビ、水生昆虫などを「**底生動物**」といいます。びわ湖にすむ底生動物は、約800種で、そのうち39種が固有種です。これは、びわ湖の固有種の約60％を占めています。

例えば、アナンデールヨコエビは、ビワマスのえさになっているなど、底生動物はびわ湖の生態系を支えている存在です。

アナンデールヨコエビ（固有種）

■水鳥の楽園（7-17 水鳥）

びわ湖とびわ湖最大の内湖である西の湖は、国際的に重要な湿地として「**ラムサール条約湿地**」に登録されており、その登録基準のひとつに「定期的に2万羽以上の水鳥を支えている湿地」があります。

冬のびわ湖には、2万羽をはるかに超える10万羽以上の水鳥がえさをとったり、休息をするためにやってきます。びわ湖は水鳥たちにとって重要な生息地なのです。

コハクチョウ

カイツブリの親子

びわ湖の水鳥

（写真提供(上記3点)：金尾滋史）

■トンボ100種類（7-20 昆虫）

良好で豊かな水環境がある滋賀県では、これまで**約100種のトンボが記録**されています。日本には約200種のトンボが記録されているので、日本にいる約半分の種類のトンボが滋賀県にはすんでいることになります。

しかし、近年、環境の変化にともなって、ミヤマアカネやハネビロエゾトンボなど分布が減少しているトンボがいることもわかっています。

ナツアカネ
（写真提供：金尾滋史）

■カエルたちの生息場所（7-18 両生類・爬虫類）

ヨシ帯が広く続く河口付近の湿地や水際は、カエルなどの両生類や、カメなどの爬虫類が生きていくために重要な場所です。

しかし、こういった水環境は限られている上に、最近ではコンクリート護岸や道路の設置により減少しており、在来の両生類・爬虫類の生息場所を守ることが求められています。

滋賀県の絶滅 危機増大種
ナゴヤダルマガエル
（写真提供：金尾滋史）

▶飼っている生き物は大切に（7-11 外来生物）

飼育が大変だから、飽きたから…どのような理由があっても、生き物は最後まで責任を持って飼いましょう。特に、元々その地域にいなかった生き物を逃がしてしまうと、生態系のバランスが崩れてしまうおそれがあります。びわ湖にも生息し、家庭でも飼育されている**アカミミガメ**と**アメリカザリガニ**は、2023年に「**条件付特定外来生物**」に指定されました。飼育はこれまでどおりできますが、飼育していたものを野外に逃がすことは禁止され、違反すると厳しい罰則が科せられることがあります。

日光浴中のアカミミガメ

■生き物を守るために（7-2 ネイチャーポジティブの実現に向けた県の取組）

私たちは、自然から得た様々な恵みを消費して暮らしていますが、便利で快適な暮らしを求めるにつれ、他の生き物が生息しにくい環境をつくってしまっています。現在、「滋賀県レッドデータブック」に載っている、絶滅の危機にさらされている生き物の数は増え続けています。

生物多様性は私たちみんなの財産です。多種多様な生き物を守るために、生き物のすみかである森林やびわ湖、川や里山などを大切にし、次の世代に引き継いでいかなければなりません。

生 物多様性　人を含めたいろんな生き物が、いろんな自然の中に暮らし、お互いの違いを活かしながらつながりあって生きていること。